

天理教布教所の仏教寺院化

戦後台湾における天理教の変容

第2次世界大戦の敗戦により、日本は植民地としての台湾を失った。新たに統治者となった中華民国（中国国民党）は、台湾社会の“日本色”を一掃する政策を取った。この対策として嘉義東門教会や北港布教所は、民間信仰を取り入れることにした。廟の玉皇上帝の神像を譲り受け、その背中に穴をあけて「神実」（かんざね）（神体）を入れることにした。神実は本来、「やしろ」の中に入れるものなのである。そして、祭壇の向かって右側、もともと教祖のやしろがあった位置に教祖の木像を、祭壇の向かって左側、もともと祖靈のやしろのあった位置に先祖の位牌を祀るようになった。

このような信仰形態の変容は、斗六教会部内の布教所の方法と一致している。それは決して単なるカムフラージュではなく、漢人民間信仰による天理教の読み替えであり、それが顕在化するかどうかの差異はあるものの、台湾漢人の宗教文化的スキーマによる天理教認識と捉えることができるのである。黄智慧が指摘しているように、「神の変名」は台湾人信者によるもので、台湾人を対象とする布教が展開されるにつれて余儀なくされた現地語化の結果だと言える。

では、なぜ斗六教会部内の布教所は仏教寺院に所属することになったのか。これは、嘉義東門教会や北港布教所が官憲による直接的な迫害をほとんど受けなかったのに対して、斗六教会部内の布教所はかなり厳しい迫害を受けたことを原因としている。同じ台湾とはいえ、地域によって“日本色”として迫害される対象は、実際に取り締まりを行う現地の警察関係者らの判断に委ねられていたのである。

天理教布教所の仏教寺院化

これらの布教所が“日本色”として迫害を受けた大きな理由は、視覚的な要素と言語的な要素であった。視覚的なものとしては、やしろや三方（三宝）、教服などが挙げられ、言語的なものとしては、祝詞やおつとめの地歌がそれに当たる。視覚的なものは、現地のもので代替することができるが、おつとめが勤修できないとなると、



「天理」と記された仏教式の位牌

天理教の信仰を続けていくことがほとんど不可能となった。筆者が当時の状況の聞き取り調査をすると、斗六教会の元布教所関係者は口をそろえて、自分の父の世代の天理教布教師は戦後何度も逮捕、拘留され、天理教を止めるよう警察署で厳しく咎められたという。そんな中、現地の警察署長の息子が病気を患ったため、天理教が本当に霊験ある宗教であれば治してみよと言われた。そこで、誠心誠意、神様にお願いをして、おたすけに努めたところ、病気が治癒した。そこで、署長は天理教が霊験ある確かな宗教として認めることにした。しかし、今のままの形で信仰を続けることはできないと言う。そこで、彼らは、どのような方法で信仰を続けることができるかと相談した結果、真一堂（齋教の寺院）へ学びに行くように勧められた。真一堂には、当時宗教団体として唯一政府に許可されていた中国仏教会台湾省雲林県支会の事務所が設置されていたのである。そして、斗六教会部内

最も早く布教所となった西螺をはじめ、崙背、斗南の布教所長らが真一堂で、まず1週間ほど修行を受けたようである。彼らは、儀礼に用いる仏教経典の読み方や意味を学ぶとともに、儀礼の作法を学んだ。それらを習得



寺院に掲げられた中国仏教会の団体会員証した結果、中国仏教会の団体会員として、仏教寺院になることができたのである。

天理教所属復帰の障害

これらの元布教所は、中央の祭壇に天公の神像を祀っていた。天公とは現地語化した親神のことである。それに加えて、仏像をも祀ることにし、それらの仏像に適した仏教経典を唱えることにした。2008年から2009年にかけて筆者は現地調査を行ったが、経典はすべて台湾語（閩南語）で唱えられていた。戦前に日本の統治下で日本語教育を受けた世代から、戦後に中国語で教育を受けた世代に継承されるときに、この台湾語による宗教的継承が行われた。その結果、日本語をおつとめの地歌とする天理教にはもはや回帰することができなくなってしまったと言う。

1970年代から、天理教本部が台湾伝道庁を中心に台湾の天理教を本格的に復興させようと動き出すが、すでにそのころには、これら斗六教会部内の元布教所ではおつとめを介さない信仰のあり方が整っており、わざわざ日本語のおつとめを学んで天理教に属する必要がなくなっていた。なぜなら、当時すでに仏教寺院として信者を集めており、毎年大規模な法会を執行していたため、再び形の大きく異なる天理教に回帰することで、すでに獲得した信者が離れてしまう恐れがあったのである。

戦後にこのような変遷をたどった斗六教会部内の布教所は少なくとも4カ所あり、筆者はこれら全てで聞き取り調査を行なった。台湾の漢人民間信仰は由来を重視する傾向がある。こうした元布教所はすでに天理教を離れ、仏教寺院として存在しているとはいえ、自らの寺院のルーツが天理教布教所であることは自覚している。その証拠として、これらの寺院の名称にはすべて「明」という文字が使用されている。これは、天理教の神である親神が「月日」と称されるという教えから名づけられたものである。また、向かって右側の祭壇は教祖の木像を祀り、向かって左側の祭壇には祖先の位牌を祀っているが、位牌にはわざわざ「天理」と彫られている。

戦後の迫害が厳しかった雲林地域において、天理教の布教所が現地の人々のたすけの場となる信仰拠点として存続するため、知恵を絞って様々な方法や工夫を探り、その結果として現在の姿がある。こうした現状について、調査し記録することは天理教の現地化を考える上でも重要なことである。

[参考文献]

黄智慧 (1989) 「天理教の台湾における伝道と受容」『民族学研究』54(3): 292 ~ 309 頁。

山西弘朗 (2011) 『天理教在台湾の信仰形態の変遷：一個宗教人類学的考察』国立政治大学民族学研究所修士論文。